

最新評伝『トム・ウェイツ 素面の、酔いどれ天使』

488 ページ～492 ページから転載

発売 20 分でソウルドアウト、17 年ぶりのロンドン公演

70 年代、ウェイツは若い盛りの時期をツアーに捧げたが、いつしかツアーにピリオドを打った。以前、ウェイツはデヴィッド・シンクレアに語っている。

■「長いツアーに出ると、おれは余計に気むずかしくなるんだ。家族を家に置いたまま、飛行機の手ケットやタクシーや会場の心配をして、ようやくホテルに落ちついて、あるのは4つの壁とテレビと製氷機だけ。昔はそんな暮らしも嫌いじゃなかったけど、いまじゃ2週間でいやになる」

ツアーから遠ざかっていたウェイツが、なんと《リアル・ゴーン》発表後、ロンドンで公演することになった。しかも一夜限りのスペシャル・ライブだった。ウェイツがロンドンでコンサートを開くのは、じつに17年ぶりのこと。コンサートの日時が発表されるとすぐに、約3700席分しかないチケットに78000件もの応募があった。ウェイツがほぼ30日間連続でステージに立たないと、応募者全員の要求を満たすことはできない。ハマースミス・オデオンで11月23日に行われるコンサートのチケットは、たった20分で売りきれた。その後、一部の席には途方もないプレミアがついて、最高900ポンドにまでつり上がった。

これほど期待されたロンドン公演は筆者の知るかぎり、30年ほど前に同じくハマースミス・オデオンのステージに立ったブルース・スプリングスティーン以来だった。

そして、ライブ当日、色めき立つ人々のなかには、ジェリー・ホール、トム・ヨーク、ジョニー・デップ、デヴィッド・グレイ、ノーマン・クック、ゾーイ・ボール、ジェイミー・カラム、ティム・

バートン、ヘレナ・ボナム＝カーターといった有名人もいたが、この夜ばかりは一般客にまじって並ばないと、ショーの目撃者にはなれなかった。

開演前のBGMは、はるか遠い時代からの選曲だった。アラン・ロマックスが収集した戦前のブルース、フォーク、そしてカーター・ファミリーが演奏するカントリーが流れるなか、幸運な人々は慎重に人ごみをかき分けながら、何十年も前のガムがこびりつき、ラガーでねばつく会場の床を歩きまわった。現在、ホールの名前はカーリング・アポロ・ハマースミスに変わっているが、ロックのかけらを体のあちこちに埋めこまれた者にとって、そこは永遠にハマースミス・オデオンだった。

時計が8時を回ると、黒装束のウェイツがステージに現れた。まるで、客をさがしにやってきた落ち目の葬儀屋だ。しかしウェイツは地獄の業火について説く説教師のようにわめき、毒づき、吠えながら、人間の犯してきた罪を告発しはじめる。ステージ上に用意されたピアノはあっさり無視して、代わりにマラカスを、うるさいセキセイインコの脳みそを飛びちらせようとするかのように振りつづけた。マイクスタンドを、絞殺魔のように両手でつんだかと思うと、拍手とともにメガホンが登場。

この日のステージは、ファミリーショーでもあった。舞台後方で息子のケイシーがターンテーブルを回し、パーカッションを叩きながら父親を見守っていた。以前、ウェイツはいつていた。

■「もし子供が親と同じ道に進んだら、まあ共演ってことになるかな。息子にはこういつてある『おまえが宇宙飛行士になりたいといひだしたら、おれにしてやれることはなにもない』」

一方、ステージの父親は“サンダーバード”の操り人形のように腰をひねり、くるりと回り、痙攣したように全身をふるわせていた。10年以上のブランクを経ても長年培った経験がものをいうのか、ウェイツの体の切れは信じられないほどよかった。ブーツで舞台を踏みならし、汗だくになって、激しく手を動かし、足を踏み鳴らし、

体を揺らし、叩きつけ……手を振りまわす。ウェイツはそんなハードな運動をすることである種のカタルシスを得て、ある行動に走るのを避けているようにもみえる。ウェイツは、かつてマーク・ローランドに語っていた。

■「たまにだれかに本気で腹を立てると、おれはしめ殺したい奴らの顔を思いだす。で、そいつらがクリスマスに撮った家族写真を想像してみるんだ。すると怒りが鎮まってく。おかげでおれは、人殺しにならずにすんでるわけさ」

ステージで鳴っている音楽は廃品置き場のテクノだった。ハンマービートのハラー、苦痛に満ちた悲鳴、歓喜の咆哮、それらすべてが、打楽器の雨が呼びもどす太古の風景と、金属音が垣間みせる衝撃的な未来のイメージで増幅された。ウェイツは《リアル・ゴーン》の収録曲をこれでもかとばかりにぶちかまし、ときおり《リアル・ゴーン》以外のナンバーも織りませた。〈アリス〉〈ストレイト・トゥ・ザ・トップ〉〈ジョッキー・フル・オブ・バーボン〉〈アイボール・キッド〉。もっとも観客を魅了したのは〈デイ・アフター・トゥモロウ〉だ。率直で赤裸々な告解を思わせる歌は、それ以前に演奏した曲すべてがかすんでしまうほどの素晴らしさだった。

■「17年ぶり、だよな。けどまあ、みんなとりあえず元気そうじゃないか。人間の3つの成長過程について、青春、中年、そして……とりあえず元気！」

長年ツアーに出なかったことをわびたウェイツは、2時間以上もステージに立ち、曲の合間に、ホット・チーズサンドイッチのうえに浮かびあがった聖母アリア像の素晴らしさについて熱く語ったり、生物学の知識を披露した。

■「雄のクモはひとばんかけて巣を張るんだ。巣ができあがると、体の一部を使って、まあ、脚だという説もあるけど、とにかくそいつで糸をかき鳴らす。その音が、雌グモをどうしようもなくひきつけるのさ。じつは、これが……」

ウェイツは秘密を打ちあけるようにいうと、ギターを持ちあげて

みせる。

■「雄グモの出した糸なんだ」

ウェイツはアンコールに応え、ふらふらステージにもどってきた。前列に向って手を振り、オーケストラ席の観客をいたぶろうとしているかのように、横目でにらみつけた。アップライトピアノが運びこまれると、ピアノまでもが喝采を浴びた。ウェイツは吟遊詩人にもどり、〈ブルースへようこそ〉と〈イリノイ州ジョーンズバーグの町の歌〉を弾きがたった。

拍手がわき起こると、今度は〈カム・オン・アップ・トゥ・ザ・ハウス〉で観客を家に招き入れ、〈ザ・ハウス・ウェア・ノーバディ・リヴズ〉でしめくくった。ウェイツがステージから姿を消しても、拍手は鳴りやまなかった。

ジェイムズ・マクネアは『モジョ』誌に書いた。

「ロンドンのギグには20年以上足を運んできたが、あれほど舞台に酔っている観客をみたのは初めてだ。だれもが携帯電話の電源を切り、ウェイツがみせてくれる自分だけの夢に浸っていた。偉大なアーティストのカリスマ的な存在感に、全員目が釘づけになっていた。ウェイツは絶滅危惧種のアーティストだ」

『オブザーヴァー・ミュージック・マンスリー』誌は、ウェイツのコンサートをギグ・オブ・ザ・イヤーに選んだ。